

革命エデュケーション 第一部

iPhoneの 先にある未来

【第四回】

相互承認・メディア・編集の終焉

【第四回】

相互承認・メディア・ 編集の終焉

3 言葉を拡散させる Twitter

8 奇妙なプレイス

15 アカウントで今を生きる！

19 生の言葉を丸呑みに

■ 言葉を拡散させる Twitter

鵜川 Twitter は、承認の方向というか機能の仕方が、他の SNS とは全然違いますよね。「イイネ！」が、基本的に本人とその記事を見る一部の人間にしか認識されないのに対して（だから閉じた、文字通り「相互」承認になる）、Twitter は、承認したことを本人ではなく、その他の自分のフォロワーに知らせる。今でこそ、@関係でリツイートされた自分のツイートを確認できる¹ようになりましたが、最初はそうではなかったですよね。ここでは「相互」の承認よりも、自分が承認したものの拡散の方が重要。なぜなら、その方がコミュニケーションが誘発され

1 現在、Twitter のホーム画面では、「@つながり」という項目で、リツイートされた自分のツイートや、自分へのリプライなどが確認できる。

るからです。Twitterは、たくさんツイートさせることを目的にして、進化してきたような気がします。mixiはむしろ逆ですよ。よっぽどのことがなければ、あまりmixi上に何かを書き込もうという気持ちは起きない。あるいは、見る人間が決まっているから、日記であっても私信のようなものになる。Twitterはそうじゃなくて、コミュニケーションそのものを外に向けて拡散していくから、どんどんツイートせずにいられなくなる。聞いている人間が増える感覚、って言い換えてもいいかもしれない。

違う経路で考えると、ホームページに対する感想や意見って、メールや、あれば掲示板で書き込むしかできなかったじゃないですか。それが、ブログになって、記事ごとにコメントを書き込むことがで

きるようになった。それが、Twitterになると、一言一言につっこみを入れることが可能になる。それって、SNSよりもずっとわかりやすく、ネットの進化なのかな、っていう気がするんです。動的で拡散的で、どこかに留まることがない、コメントの無限運動みたいな。

SNSは、場所を与えて、さあコミュニケーションしろ！みたいな感じだと思うんですけど、Twitterは、ただつぶやきさえすれば、それがコミュニケーションに取り込まれていくみたいな感じですかね。いまいちうまく表現できませんが。

細井 そうですね。思いがけないところからレスが返ってきたりすることがある。これは、mixiやFBでは基本的にないことですよね。そのあたりの「開かれてる」（と言っておきます）感じが面白

くもあり、見知らぬ人から見られていることに対してちょっと不安に感じるところでもあり。あと、Twitter に関して言うと、自分という個人の立ち位置が希薄化される面がありますよね。その人の主義主張や発言の文脈がどうこうというより、面白いことを言った奴が勝ち、みたいな。そのへんも面白く感じる部分と、違和感を感じる部分と両方ある感じですね。ここまで mixi/FB と Twitter、対照的な性格を持っているツールとして論じてきたんですけど、僕個人の経験からすると日常のコミュニケーションとは異なる感覚というのはどちらにも感じていましたね。前者は当然その「仲良しコミュニティ」的性格に、後者には先述の「不意打ち」的性格に。

鵜川 そうですね。その両極端な性格が、

おそらく mixi をより閉鎖的なものにしたんだろうと思います。(FB のビジネスツールの側面が強調されるようになったのも、単にコミュニケーションがアメリカ化した²というより、コミュニケーションそのものの面白さやハプニング、拡大を楽しむ人たちが Twitter に流れた結果な気がします。) クローズドなコミュニティは、所詮サードプレイスの³変種であって、リアルに発生するコミュニケーションの拡大／強化されたものでしか

2 Facebook は、もともとハーバード大学内における学生同士の交流を目的としてスタートしたことや、実名登録を義務付けていたことで、ビジネスと親和性の高いツールとして進化してきた。

3 アメリカの社会学者レイ・オールデンバーグが 1989 年に提唱した概念。「ファーストプレイス」を「家」、「セカンドプレイス」を「職場」とし、その中間にあって、都市生活者が心のよりどころとすべき場所として「サードプレイス」を定義した。例として挙げられているのはカフェやパブだが、ネットに発生したコミュニティもまた、この亜種として考えることができるだろう。

ない、ということでしょうか。

ところが、Twitter で発生するコミュニケーションは全く別。そもそも、そこには従来の「プレイス」らしきものが生まれません。あえて言うなら、それぞれのホームの TL がプレイスになるのであって、それは共有されない。

■ 奇妙なプレイス

鵜川 そういえば、以前興味深い指摘を読んだんですが、自分の TL と同じ TL を見てる人は、この世に二人といたいですよね。だから、自分の TL で見た話題や意見は、必ずしも世間的に広く認知されているとは限らない。確かに、自分がフォローしてる段階で、かなり恣意的なセレクションが入ってるわけで、TL で客観性が確保されているとは思いません

んが、それこそ、そこで見ていた意見と世論とが大きく食い違っていると、やはり驚きを覚えます。

そう考えると、Twitter がもたらすコミュニケーションは、TL というプレイスに、「不意打ち」として、リプライや、フォロワーがリツイートしたツイートが入り込んできて、それに対応するという形になる。で、そこで共有されているのは、厳密にはお互いのツイートしかない。これは、プレイスにいる人が、ある程度情報の共有を前提にしながらコミュニケーションするのは、全く別ですね。

細井 Twitter の登場～流行が、mixi の閉鎖性を高める方向に向かったというのはナットクできますね。当時

は Myspace なんかも盛んだったので、いかにユーザーを囲い込んでいくか？という課題に対して、あーゆー戦略が出てきたんだと思います。実際、mixi、FB、Twitter のユーザーというのは重なってない感じがありますね。あとブログを加えてもいいですけど、やっても二つまでで、それ以上は（時間的な問題はさておき）ユーザーのコミュニケーション志向によってどれかが選択されていくという状況のような気がします。

あと、プレイス（笑）の話をする、FB はやはり囲われているイメージですね。2ちゃんじゃないけど常駐してる人がいるイメージ。だからコミュニケーションが濃い……というよりは粘着し

4 主なネットワークサービスの開始された年を挙げておく。Myspace：2003年 / Facebook・mixi：2004年 / YouTube：2005年 / Twitter：2006年。

てるイメージですね。みんなのコメントに一言ずつ返す感じというか。一方、TwitterはTLを見て、そのタイミングで興味を惹かれたツイートに反応する感じですかね（僕の周囲には、とりあえず全部読むという人もいるみたいですが）。その意味でさっきの自己の話とつながりますけど、構築的／拡散的、自己同一性の高さ／低さ、みたいな感じでマッピングできますね。

鵜川 全部読まない、というか、読めない、っていうのは、それまでのコミュニティに対して、結構特殊かもしれませぬね。かつての2ちゃんねるなんかは、実際に情報量が多すぎて、でも中心にいる人たちは全部読んで、だからハードルが高かった。一方で、例えばmixiの日記なんかは、前にも書きましたが「私

信」としてのニュアンスが強いので、読まれていることが期待されている（僕は、全部読むことをあきらめてしまいました）。そもそも、いわゆるサードプレイスの延長としての SNS は、その性質上、全部読んでることが期待されている。そこでのコミュニケーションの前提に、一定の情報共有があるから。でも、Twitter は読まれてることを前提しなくていい。だからこそ、自己同一性はおのずから低くなる。あるいは、同一性という見方そのものが成立しないのかもしれない。そもそも、「このコメント」と「次のコメント」を結びつける根拠が同一性なわけですが、Twitter の場合は、その両方を参照してもらうことを期待できない。もちろん、Twitter が生み出すのはそういった関係性ばかりではないのでし

ようが、例えばリツイートによって飛び込んでくる見知らぬ人のツイートは、そういったものになりますよね。

細井 その「突然飛び込んでくる他者のツイート」てのは、ある意味で実社会でもありうるものなのかな、とちょっと思いました。今までFB的なSNS、Twitter的SNSと分けていて、現実の人間関係に近いのはFBかと思っていたのですが、実はそう単純でもないですね。FB的SNSは、閉じた友人関係をベースにしているわけですが、それだって現実とは違って過度に可視化されているわけで、以前も書きましたが、現実の対立項、という発想で考えても意味がないですね。むしろ、これらのコミュニケーションは、今までにはなかった新たな体験なんだと思います。と言うと、ちょっと

ポジティブなニュアンスが先行しちゃいますかね。まあ、「新しい体験」と言っても、そこまで可能性を見出してるわけではなくて、要するにその場におけるコミュニケーション・スキルみたいなのを身に付ける必要性が出てくる、という意味合いなんですけど。デジタル・ディバイド⁵（懐）的な意味合いというか。で、そういったメディアとかツールの変化にルールの制定が追いつかなかったりするようなどころに、今話している自己や人間関係をめぐる状況というのものもあるのかなと思うんですね。

5 IT機器を使いこなせるか否かで生じる情報量の格差。インフラ整備や世代間での格差が大きかった90年代後半のアメリカにおいて多く用いられた言葉。現在はより複雑化した原因によって問題化している。

■ アカウントで今を生きる！

細井 で、ちょっと掘り下げてみたいのが、さっきも出た自己の同一性という問題です。鶴川さんがさっき書かれていたように、もはや Twitter とかでは自己を形作る必要すらないですよ。もちろん、ログを辿ればその人の生活や趣味・嗜好（思考・志向）がある程度見えてくるんでしょうけど、ひたすらリツイートだけして、しかもその領域がかなり横断的だったりすると、その人の「顔」（敢えて使います）は見えづらいですよ。そこにはもはや「同一性」を保証するもの自体が存在しない。そうすると、古典的な自我観からすると「主体」が存在しないも同然ですよ。これはなかなか面白い問題だと思います。というのは、そのと

きどきの TL に反応する断片的な自己があって、他者のツイートを RT したりお気に入りに入れることでそれらを自分のものとする（アクセサリーを身につける感じかもしれません）、時にはリセットする……ってやってると、本当に自己が伸縮している感覚を覚えるというか、他者との境界みたいなものもウェブ上では薄まる感じとかもあるのかな、とか。集団知の問題とも関係しますが、興味深いと思います。

鵜川 前にアカウントの話で触れたところとつながってくる感じですね。もしかすると衣服に近いのかな。着脱が容易であるということ、着るものによって自分のキャラを打ち出しやすいということ、本人は今着ている服に対して責任を負うということ、でも昨日着ていた服と今日

着ている服が全然違うからといって、そのことを責められたりはしないということ。もちろん、このアナロジーで見えてくるのは、Twitterのある一部分でしかないとは思いますが、こう考えると、自分が着ている服にコンセプトを導入することよりも、衣服が瞬間ごとにコミュニケーションを誘発してくれることの方が重要、ということになる。これらの衣服の集合として浮かび上がってくる図像が、ある種の集合知になると思うんですが、それは知識や思潮のようなものではなく、もっと漠然と思考の流れそのもののようなものなのかな、と思うんです。で、その中から、個人が好みの図像を選び取って、身にまったり消費したりする。結果的には古着を着まわしてる、みたいな感じですか。うーん。衣服のアナ

ロジーではこの辺が限界かなあ。

細井 着脱可能とか、TPO に応じてそれを使い分けるという意味では、衣服というのはピッタリ来ますね。実際、僕たちは社会的な関係性によっていくつもの自己を演じているわけで。ただ、古着の着まわしの話は、正直ピンと来ませんでしたけど（笑）。どっちかというところ、同じ価値観や嗜好を共有する人たちが、ファッションの趣味が似てくるように、ある種のクラスタ⁶的な共同体が形成される、みたいなイメージですかね。90年代に、原宿や渋谷、下北とか、それぞれの街に集まる人のファッションの共通性と特徴が語られたみたいに。人の流れだから、さっき鶴川さんが書いていた紋様というか、流動的な感じも伝わるかな、

6 同じような思考や趣味を持つ人の集団。

て感じがします。

■ 生の言葉を丸呑みに

鵜川 古着っていうのは、それこそ、誰も新品の服を着てないんじゃない、みたいなニュアンスのつもりで書きました。自分の言葉で語ってない、というと、「自分の言葉なんて、そもそもなくない？」みたいなことになりますが、そういうレベルでなく、編集もアレンジもしてない他人の言葉そのものを身にまとっているような。リツイートなんかはその最たるもので、それにコメントをつける場合も、言葉らしい言葉は使われてない。140字っていう制限の一つの問題かもしれませんが、語ることやできることのパターンが、意外と多くない。特に、タイミングやスピードを重視しているユーザーの

場合（って、Twitterだとそうならざるを得ない？）、定型句的な言葉が無限生成されていくみたいなどころがある気がします。「そろそろ、その服捨てない？」ってところまで着倒す、みたいな。で、服を作ってる人が、いやに少ない。

細井 ああ、そういうニュアンスの話ですね。インターネット以後、誰でも情報発信できるようになったというのが定型文的に語られるんですが、「発信」している内容はどうなのか？　というと、コピペ（メンタリティ的なものも含め）だったりパッチワークだったりてのが多いと感じます。その流れは、Twitterが出てきてから加速してる感じがしますね。ブログ全盛期は、それなりに情報を咀嚼そしゃくして自分の意見を加えたりしていたのが、Twitterになって横流しが多くなっ

た印象はあります。

でも、服を作ってる人はいつでも少ないんですよ。一時期から学生や生徒の課題についてのコピー問題というのが言われるようになりましたけど、かつての学生たちが自分で考えていたか？ と言ったらたぶん違うんですよ。本や先輩のレポートが再利用されているだけという(笑)。

鵜川 そう考えると、むしろ編集能力の低下を問題視すべきなのかもしれませんね。かつては、古着を組み合わせるアレンジを加える——本や先輩のレポートであっても、情報を組み合わせることで体裁を整えようという気概(笑)があった。ブログも、書き手の考えを表明するというよりも、知識や情報や考え方の「組み合わせ」の方が重要だった気がします。

そう考えると、やはり 140 字問題にかえってくる。流れていく情報が編集以前の生のものなのに、ほとんどの人がそれを調理せずに、生のまま食べる。生のまま食べて、それでおしまい。せめて海鮮丼ぐらいになればいいんですが、そんなことできないぐらいに多種多様な情報が、すごい速さで流れてくる。情報の鮮度っていうのは、もはや比喻ではない。腐る前に食べて消化して、忘れなきゃいけない。

細井 情報の量の増大と消費の加速が、編集という作業すら駆逐してしまった、という……。90年代はそれこそ編集の時代という感じで、音楽にしる映画にしる、情報の切り取り方と提示のセンスが問われていた、という印象があるんですが、今だともうとりあえず出しとけみた

いになってる。

それと繋がるのかどうかわからないんですが、文脈（より大きく言えば歴史）というのももはや消滅してきてるな、と思います。個々の情報だけがゴロンとあって、それがどういう流れで出てきたのかとかが重視されない。だからレポートでも、物凄い昔の論文だったり考え方が平気で出てくる、みたいな。これもさっきのキーワードで言うところの「断片化」という流れに含めてしまえるんでしょうか？

鵜川 確かに「断片化」ですね——情報相互の関係性ととともに、大きな時間軸の中でも切り離されてしまっている。そうすると、消費する側にとっては、もはや鮮度は問題じゃない（もちろん、情報を流すことで利潤を得ようとする側にとっ

てはそうではないが)。というか、鮮度という考え方をしようとするれば、当然そこには時間概念を導入しなくちゃならないわけですが（時間概念がなければ、そもそも古くならない）、全ての情報がディスプレイという「いま、ここ」に集約するのであれば、鮮度という発想自体成立しない。で、それらの情報を引用——というか横流しする主体自体も「断片化」しているので、その情報を横流ししたかどうかすら覚えてなかったりする。リツイートは、その最たるものでしょうね。自分の言葉が微塵も入っていないから、それを「復唱」したという記憶も残らない。

(以下次号)

《革命エデュケーション》

iPhone の先にある未来

【第四回】相互認証・メディア・編集の終焉

平成24年6月25日 発行

著者 細井正之・鶴川龍史

編集者 鶴川龍史・細井正之

発行所 世田谷学園 国語科